

生涯教育

2023
春

季刊 No.131



大浦天主堂（長崎県）

理事会・評議員会および研究助成金授与式・論文入賞者表彰式開催	2
伝統文化「文楽」に親しむ	6
カルロス菅野～熱帯スペシャルコンボ～ラテンリズム講座	8
メディアアーティスト派遣	10
デジタル一眼レフカメラ入門	12
「都内の美術館」をたずねて	13
プロフィール・インタビュー 放送大学長 博士(学術) 岩永 雅也さん	16

いつでも どこでも だれでも学べる



公益財団法人 北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION



理事会・評議員会および 研究助成金授与式・ 論文入賞者表彰式開催

新しい時代を見据えて学びの継続を



2022年11月11日、The Okura Tokyoにて理事会・評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われました。評議員会では、第49期決算および第50期予算が報告され、すべて承認されました。

その後、会場を移し、研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われました。冒頭、財団を代表して北野七重専務理事が次のようにあいさつしました。「前回の授与式・表彰式はリモート開催でしたが、今回は対面で開催できたことをうれしく思います。授与された皆様、入賞された皆様、本当におめでとうございませす。2022年を振り返ると、ロシアのウクライナ侵攻、急速な円安や物価高など、先行きの見えない状況が続いています。コロナも収束を見ていません。しかし、いつか次のステップを踏み出すときが必ず来ます。当財団はそのときを見据え、いつでも、どこでも、だれでも学べる、をモットーに、人間性豊かな人を育て、実りある人生を送ることができるよう、そして自己の人格を磨くことができるように、生涯にわたって学びの機会を提供してまいります。」



あいさつをする
北野 七重専務理事

研究助成金授与式

続いて、生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われました。今回は助成した10名のうち8名が出席し、一人ひとり研究題目と概要を発表しました。

「看護大学生自己調整学習方略を促進する教育プログラムの構築」
自己調整学習方略尺度の信頼性・妥当性および関連要因の検討」



谷村 千華さん
(鳥取大学 教授)

医療の現場は目まぐるしく変化しています。多様化している患者に対応するために、私たち看護職には生涯教育がますます大事になっています。新しい知識、スキルを日々更新していかないとついていけない。その気持でこの研究に取り組んでいきたいと思えます。

「学校資料による地域の再発見」
資料保存活動の普及を目指して」



楠瀬 慶太さん
(高知県の
学校資料を考える会
事務局長)

活動を通して、学校資料は地域の再発見

見につながることを地域のの人に知ってもらいたいと考えています。過疎地域では統廃合で次々と学校がなくなっています。資料を残し、学校が地域に果たした役割を一緒に考える機会になればと思っています。

「持続可能な地域コミュニティづくりに資する博物学の共創」



佐藤 裕司さん
(兵庫県立大学
自然・環境科学研究所
SDGs推進室 特任教授)

この研究では、博物学が高齢者にとって生きがいになること、理科離れが問題になっている子どもたちにとっては自然科学への扉を開くきっかけになることを明らかにしていこうとしています。

「神経難病患者に対する肯定的な関わりを推進するための看護師支援プログラムの開発に向けた基礎的研究」



長谷川 幹子さん
(岩手保健医療大学 教授)

ALSやパーキンソン病などの神経難病は、原因不明で根治治療がなく、特有の関わりの難しさがあり、看護職全体の精神的健康の悪化や看護の質の低下

につながっています。この研究では、神経難病患者への肯定的な関わりを推進するための看護師支援プログラムの開発に取り組んでいます。

「若年層を対象とした日常的スポーツ支援活動の促進・阻害要因の検討」



元嶋 菜美香さん
(九州産業大学
健康・スポーツ科学センター
講師)

現在、スポーツ教室やイベントを支えるボランティア、指導者が不足しています。この研究を通して指導、運営を管理する団体に有意義な情報の提供を目指します。スポーツを支える楽しさ、指導する楽しさを若年層に伝え、地域のスポーツ環境を守っていききたいと思っています。

「『生涯学び続ける学校教員』の育成システムの構築」



笠井 香代子さん
(宮城教育大学
教育学部 教授)

昨今、教員の業務が多様化して自己研鑽や研修の時間が確保できない現状があります。また、教員の大量退職、新人の大量採用の影響で、技能・知識の伝承も課題です。本研究では、生涯学び続けられる教員の育成システム構築を目指します。

「地方における生涯教育で学芸員制度が果たしてきた機能と役割の検証」
〜韓国との比較から〜



宇仁 義和さん
(東京農業大学
生物産業学部 教授)

博物館は生涯学習、社会教育に寄与する機関ですが、学芸員が果たす役割は広く認知されていません。博物館の学芸員が各地方で専門性や人脈を生かして生涯学習に尽くしていることを伝えていきたいと思っています。

「探究学習プログラム開発への『参加と協働』における生涯教育の機能」



澤邊 潤さん
(新潟大学 准教授)

学校、大学、地域社会がチームとなつて、学校で展開されている総合的な学習の時間を一緒に作っていくことが研究の目的です。多様な背景、経験を有する地域の方々が学習材として教育に参加し、新たな生涯学習機会を創出していくことを目指します。

講評

「生涯教育」に関する 考えの熟成を実感



研究助成金選考委員長
放送大学長
岩永 雅也

最近の傾向として、生涯教育、生涯学習それ自体を研究するテーマが少なくなってきたと感じます。今回の皆さんのテーマを拝見しても、課題を解決するために、こういう教育をするために、こういうスキルを高めるために、といったより上位の目的があり、そのために生涯学習をどう用いるかについて研究しようと考えられています。生涯学習が他の教育と同じように意味で手段化しているのではないのでしょうか。私たちも、助成対象者を選ぶ際に、ただ生涯教育を研究するのではなく、それによつ

て何をするのかを重視したいと考えました。北野財団の力によるところが大きですが、日本の中で生涯教育、生涯学習に関する考えが熟成してきたことを感じています。

皆さん自覚されていると思いますが、助成金を得ることがゴールではありません。これから、調査、研究、分析等、大変なことが待っています。皆さんに贈る言葉として、おめでとうではなく、期待しています、がんばってください、と言わせていただいで、私の講評とさせていただきます。



論文入賞者表彰式

続いて、第44回懸賞論文入賞者の表彰式が行われました。今回のテーマは「迷ったときの決断」。全国から417編が集まり、18編が入選しました。表彰式に出席した入賞者には北野七重専務理事より表彰状と目録が渡されました。

第1席「親でなく親のような存在」

原田 宜子さん
(岡山県・農家)

弟一家の事情で突然1歳と3歳の幼子を預かり育てることに。悩み苦しみなながらも精一杯の愛情を注いできた。小学生となった二人から、ここまで大きくしてくれてありがとうと感謝の気持ちを伝えられた。子供たちにとってこの家が本当の我が家になったときだと感じた。同時に、これからも私たちが育てていくと覚悟を

持った瞬間だった。

第2席「大丈夫。いつかみんな笑い話」

大久保 文栄さん
(大阪府・主婦)

新卒で入社した会社を研修中に退社。劇団に入り、夢だった役者生活をスタートした20代の決断。テレビドラマに出演を果たすも、息子を女手一人で育てることを決断した30代。何かを決断する際の思考を擬人化して分析、表現しながら書いた。

第2席「喪う約束」

小林 多恵子さん
(広島県・歯科医師)

咽喉がんを患う患者が、突然治療をやめると告げた。それは、最後に彼女が自分であるための命がけの決断だった。私に突きつけられた、治療方針をめぐる苦悩と決断。彼女の決断を自分の決断とした判断は正しかったのか当時の思いを語った。

第3席「運命を変えた手紙」

後藤 里奈さん
(東京都・高校教諭)

夢を叶え英語教師となったが、理想との違いに半年ほどで限界を感じ、辞職を考えるようになったある日、一人の女子生徒から「一生懸命な先生からいつも元気をもたらしています。先生らしくがんばってください」と綴られた手紙を受け取る。自分の不甲斐なさを自覚し、もう一度生徒と正面から向き合おうと決意した。あれから10年、今でも教師を続けられているのは、彼女の手紙のおかげだと感じている。

第3席「私の決断」

坂本 直子さん
(宮崎県・主婦)

人工透析中に脳梗塞になり入院した父の延命措置をめくり、辛い選択を迫られ

た。100歳近くまで長生きした父。自宅では人工透析はできない。究極の選択だったが、父が帰宅を望んでいると感じ、自宅に連れて帰る。奇跡を願って看護したが、父親は手を握りながら一週間後に帰らぬ人となった。父が満足したと言える決断ができたのかと問いかける。

第3席「日本で暮らすという選択」

徐 亜文さん
(広島県・大学非常勤講師)

大きな決断が二つあった。一つは誰もがうらやむ国家公務員を退職しての日本への留学。二つ目は中国に帰るか、日本に残るか。来日してから25年。コロナもあり中国に帰れず、実家の老いた母に会いたい気持ちがある中、日本に残って本当に良かったのか心が揺れるが、自分の選択に後悔はない。

第3席「自分に強く正しく」

田村 和幸さん
(北海道・中学校校長)

二度目の咽喉がんに侵され、余命があと一年半になる可能性があると告げられた。進行を遅らせる抗癌剤治療が、辛い後遺症が残る可能性のある外科手術か。悩んだ末、後遺症と共に生きるのが使命だと決断し、手術を受けた。幸い後遺症も低減され、今は看護学校の講師を務める。自分で決めた以上、精一杯生きるだけのこと。その使命がある限り、これからも寿命は続く。

第3席「眠っていたピアノ」

豊田 恭子さん
(福岡県・公務員)

ピアノリストになるのが夢だったが、音楽大学に合格できなかったことにショックを受けて、きっぱり諦めて一般大学に進学。およそ30年間ピアノに触れることはなかった。しかし仕事に余裕ができ、好きな

ことをする楽しみを初めて感じ、ピアノへの気持ちに変化が訪れ、わだかまりを捨てて素直な気持ちでピアノに向き合えるようになった。



▲北野専務理事から賞状を授与される
第1席 原田 宜子さん



◀後列左から豊田 恭子さん、坂本 直子さん、徐 亜文さん、田村 和幸さん
前列左から小林 多恵子さん、原田 宜子さん、北野 七重専務理事、耳塚 寛明審査委員長、城 真二常務理事、大久保 文栄さん、後藤 里奈さん

講評

『関ヶ原』に見る 決断の本質



審査委員長
青山学院大学 学部特任教授

耳塚 寛明

論文の審査をさせていただくようになって、気がつけば今回で20年目になっていました。毎年必ず思うことが二つあります。一つは、日本もまだ捨てたものではないということです。優れた論文を書ける人がこれだけいるんだと感心します。二つ目は、涙が止まらなくなるものが必ずあることです。今回もありました。入選者の皆さん、感動を届けてくださりありがとうございます。

今回のテーマは「迷ったときの決断」。決断というと、しばしば、司馬遼太郎の『関ヶ原』の次の一節が引用されます。「勇気と決断と行動力さえ持ち合わせておれば、あとのことは天に任せればよい」。この石田三成の言は、

実は後悔です。三成は決断しなかったことを悔いているのです。

関ヶ原の戦いが迫りつつあったあの夜、家康は藤堂高虎の大阪の屋敷に泊まっていました。三成は好機到来と捉え、夜襲をかけようと提案します。ところが仲間たちに反対され、諦めた三成が屋敷に戻る帰路、濃い霧が出ました。あのとときやる、と決していれば、襲撃はこの霧に助けられたに違いない。この瞬間の三成の後悔が、先の決断論にほかなりません。

三成の決断論が示唆している決断の条件は、第一に戦機を逃さぬこと。第二に一度決断したからには後は天に任せることです。決断の成否は天

〈私の生涯教育実践シリーズ '22〉

『迷ったときの決断』

1,000円
ぎょうせい刊

ご希望の方は
財団事務局までどうぞ。



任せ、なのでしよう。決断の本質の一部はここに表れています。けれども、決断にはそれ以前の条件があります。それは自己の信念や存在意義を左右するような決断だということです。万が一そう決断しなければ、何を大切にして生きてきたのかが見えなくなってしまう。そういう選択こそが決断だと思います。

決断には帰結が伴います。成功も失敗もある。けれども成功しなければ決断には意味がないというわけではありません。一見失敗ではあれ、そこに潜む成功を見ておきたいと思えます。それが時代と人生にとっての糧となると思うからです。

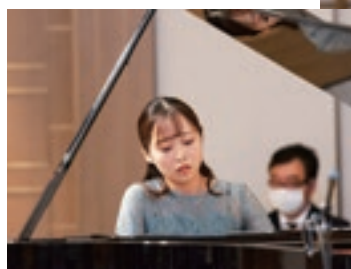
音楽奨学生による演奏

講評に続き、愛知県立芸術大学の音楽奨学生による演奏が行われました。三人が奏でる美しい音色に来場者一同が酔いしれました。



◀力強く軽快な音を響かせるヴァイオリン 飯田さん

▼軽やかな澄みきった音色を奏でるフルート 西浦さん



◀憂いのある叙情的な演奏 ピアノ石田さん

プログラム

フルート：西浦 千陽さん
(ピアノ伴奏：石田 明日香さん)

愛知県立芸術大学
音楽研究科博士前期課程 管・打楽器領域1年
「モーツァルト ロンド K.Anh184」

ピアノ：石田 明日香さん

愛知県立芸術大学
音楽研究科博士前期課程 鍵盤楽器領域1年
「ショパン ノクターン第20番 遺作」

ヴァイオリン：飯田 桐乃さん

愛知県立芸術大学
音楽研究科博士前期課程 弦楽器領域2年
「プロコフィエフ 無伴奏ヴァイオリンソナタ Op.115 第1楽章」

伝統文化

「文楽」に親しむ

8月27日、めぐろパーシモンホール小ホールにて、公益財団法人文楽協会豊竹靖太夫氏、鶴澤清公氏、吉田玉翔氏を講師に招き、人形浄瑠璃文楽の入門講座が開かれました。

三業の実演

武将がタダンとの拍子とともに手摺の上で舞い、太夫が語り、三味線が奏でられます。人形に命が吹き込まれ人形浄瑠璃文楽の始まりです。「雅楽之介の進」が最初に披露されました。武将の力強さと迫力に圧倒されました。人形浄瑠璃文楽は、太夫、三味線、人形遣いの三業で一つの舞台を作ります。



タダンとの拍子とともに武将が舞います



太夫と三味線

太夫は、セリフや情景を声色を変え語りまします。子供から年寄り、武将までを一人でこなします。子供であれば高めにゆつくりと、武将は太く歯切れよく発します。また感情も、楽しい、驚き、悲しさを抑揚などで表現します。その他、太夫の衣装や



太夫解説 (左) 豊竹靖太夫



三味線解説 鶴澤 清公

道具について解説いただきました。

三味線は、太夫の伴奏ではなく太夫と一体となり、情景を奏で表現するものです。感情から雨風の音までを音色で表現します。いくつかのパターンを奏でてもらいましたが、本当に情景が伝わってきました。三味線は、大きめの太棹(フトザオ)を用います。弦を弾き、ときには太鼓のように胴体の革を叩きます。その撥(バチ)は通常の三味線のものより厚く大きなものとなつています。撥の材質は象牙であり、海外公演には持つて行けないなどの苦勞があるようです。三味線の構造なども教えていただきました。

人形遣いは、主遣い、左遣い、足遣いの三人で二つの人形を操ります。三人遣いは、世界的にも稀な人形劇です。



人形解説 吉田玉翔



スクリーンで拡大し解説

「主遣い」は、頭・顔のかしらと右手を動かします。かしらについている紐を引っ張り目や口を動かします。バネが仕込まれています。クジラの髭たそうです。「左遣い」は、人形の左手を動かします。右手で演者は右手で動かします。拍手の動作が難しく、主遣いの合図に合わせて右手と左手を合わせるそうです。



三人遣い



妖艶な動きを三人で息を合わせ

「足遣い」は、人形の足を動かします。女方の人形には足がなく、足遣いの手で衣装を動かし、足さばきを表現します。妖艶な所作も見事です。

三人の息がピッタリと合い、人形が生ききているかの如く動くさまは、本当に見事です。

伊達娘恋緋鹿子 火の見櫓の段の鑑賞

解説を受けた後、「伊達娘恋緋鹿子」のハイライトである「火の見櫓の段」を公演いただきました。

八百屋の娘お七は、恋人が探している名刀を手に入れましたが、夜は木戸が閉じられ届けることができません。降りしきる雪の中、お七は木戸を開けさせるために、火事を知らせる火の見櫓に登ります。舞台から人形遣いが一人消え、二人消え、しまいには誰もいなくなってしまう。にもかかわらず、お七は櫓を登っていく、鐘を鳴らします。見応えある演出でした。



クライマックスの櫓登り



お七



ミニ公演開演

人形遣いの 顔出し

質疑応答コーナーを設けたところ、人形遣い（主遣い）が顔出して演じているのは何故？と質問がありました。元々は黒い頭巾を被って演じていたのですが、あるとき観客から顔を見せて欲しいとのリクエストがあり、顔を出して演じるようになったようです。世界的に見ても人形劇で顔をだしているのは人形浄瑠璃文楽だけだそうです。また、お七が櫓を登るときに人形遣いがいなくなりました。どうやって櫓を登る？との質問に、なんと櫓をひっくり返し、登る様子の内側を見せていただき、文楽の仕掛けを公開していただきました。



質問コーナー



櫓の裏を見せてもらえました



質問に答える吉田玉翔

今回、人形浄瑠璃文楽の裏側を含めて見せていただきました。またユーモア溢れる解説で会場が沸きました。初めてご覧になる方から、文楽ファンの方まで楽しめる講演会となりました。文楽協会の演者、舞台方そしてスタッフのみなさんに改めてお礼申しあげます。是非、人形浄瑠璃文楽の本公演に足をお運びください。次回以降も伝統文化や舞台芸術などでみなさんに喜ばれるような企画をしてみたいです。



カルロス菅野 ～熱帯スペシャルコンボ～

ラテンリズム講座

12月4日(日)、めぐろパーシモンホール小ホールにて、カルロス菅野氏率いるラテンJAZZスペシャリストによる「熱帯スペシャルコンボ」を招き、ラテン音楽の歴史や珍しい楽器の音色と演奏の仕方、そしてラテンリズムを学ぶ講演会を開催しました。

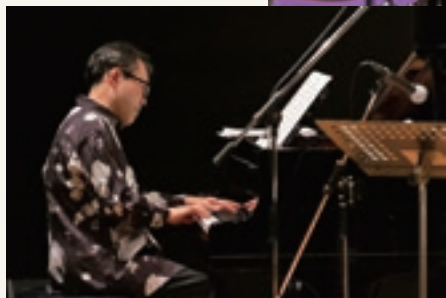


ラテン音楽の 成り立ち

ラテン音楽はその昔、ヨーロッパの船団が黄金の国ジバングを目指して大航海した際、偶然アメリカ大陸の端にあつたカリブ海の島にたどり着きました。そこに元々住んでいた先住民たちの文化、音楽、リズムと、船で連れてこられたアフリカの人たちの文化、音楽、リズム、そしてヨーロッパの人たちのそれが見事に混ざり合って生まれたのがラテン音楽の起源とされています。



ドラム 岡本 健太



ピアノ 奥山 勝



ベース 箭島 裕治



サクソ 安川 信彦

自然と笑顔が溢れ、 体が動き出す

ステージ上にはドラム、ベース、ピアノ、コンガ、ボンゴ、サクソなど狭しと並び、ノリのよい陽気なラテン音楽から始まりました。初めは静かに耳を傾けていた参加者でしたが、心踊る心地よい素晴らしい演奏に自然と笑顔になり、体でリズムを取り、手拍子をしていきます。次の曲では、途中で神様を呼び降ろす声を張り上げるアフリカ系のリズムの強い曲を、さらに次の曲ではJAZZ色の強いお洒落な曲など、様々なタイプのラテン音楽を鑑賞しました。



プロジェクターに映して解説



顔を見ながら即興で演奏

楽器の紹介ではひとつひとつプロジェクトに映しながら、それぞれの音色と演奏の仕方、特徴を解説いただきました。コンガやボンゴは「じつはとても手が痛い。手を血で染めて練習します」と裏話を聞くことができました。コンガ、ボンゴの2つがラテン音楽のベースを作るアフリカ起源の楽器です。これにティンバレスを加えた3つが主にラテンリズムを刻みます。マラカスやギロ、シェケレの紹介をすると、その音に合わせてバンドが即興で演奏するなど、譜面上には何も書いていないのですが、その場のノリに合わせて演奏していることを解説されました。音楽がちやこちやにならずにまとまったリズムになるのは「クラーベ」のおかげです。これがラテン音楽を演奏するうえで常に体の中にリズムを刻んでいます、とお話されました。

いざラテンリズムを刻んでみよう

ラテンリズムの基本である2つのパターン「ウン・パバ・パウンパバ」と「パウンパバ・ウン・パバ」のリズムをカルロス菅野氏の指導のもと手を叩き練習した後、いざ音楽に合わせてやってみると、最初はすっかり合っていたリズムが途中から徐々に乱れはじめ、どんどん怪しいリズムを刻み思わず苦笑い。「小学校でこの実験をやるともう少し上手くいくのだけれど…」の声に参加者の皆さんはさらに真剣に。何度か演奏に合わせて手を叩くようにやくステージと客席のリズムに一体感が生まれ、笑顔が溢れる盛り上がりとなりました。

チャチャチャやルンバ、サンバのリズム曲を演奏され、様々なラテン音楽を聴くことができました。サンバにはボンゴは使わないことなどその都度、面白おかしくわかりやすく解説いただき、とても楽しい講演会となりました。

コロナ禍のおり、舞台上で楽器を触ったり鳴らしたりなどの体験は叶いませんでしたが、座席に座ったままラテンリズムを刻むことができ、参加者からは「本当に楽しかった」「元気をもらった」「また開催して欲しい」など、多くの声をいただきました。心も体も温まる講演会になりました。財団はこれからもみなさんが元気になる講演会を企画してまいります。

楽器紹介

コンガ conga

樽型の胴の上面にヘッド(皮)が張つてあるラテン音楽で用いられる打楽器。元来キューバの民族楽器。素手で演奏する楽器で、手の使い方や音色を変化させてリズムを作り出す。



コンガ 荒川 琢哉

ボンゴ bongo

ラテン音楽で用いられる小形の太鼓。木製の桶形の枠に子牛の皮を強く張つたもの。音高の異なる二つをつないだもので、股(もも)の間に挟み、手で打って鳴らす。



ボンゴ、手前にはマラカス

ティンバレス timbales

ティンパニーから変化したアタックの鋭いメタル胴のドラム。ヘッド(皮)が上側のみに張つてある。通常は2台のティンバルをスタンドに左右にセットし、カウベルも同時にセットする。専用の細身のスティックで叩く。



ティンバレス

クラベ clave

円筒形の拍子木のような木の棒を打ち合わせる打楽器。左手でクラベを水平に支え、右手のクラベで打ちつけて演奏する



ラテンリズムを刻むクラベ

ギロ guiro

ヒヨウタンの内側をくりぬぎ外側に刻みを入れて棒でこすつたり叩いたりして演奏する打楽器。体鳴楽器に分類される民族楽器。



ガリガリと音を出すギロ

マラカス maracas

もとはマラカという空洞の木の実に持ち手を付けたシェイカーの一種。ラテンでは牛革で作られたものを使い、両手に持つて振ることで音を鳴らすラテン楽器。

シェケレ shekere

伝統的な民俗音楽の楽器。大きな中空の瓢箪の周りに植物の種子・豆・貝・ビーズなどを通した網を編んで張り巡らせた打楽器。



シェケレの紹介をするカルロス菅野

メディアアーティスト派遣

2022年6月22日に宮城県松島町立松島第一小学校、8月31日に宮城県気仙沼市立気仙沼中学校の二校にて、メディアアーティストの橋本典久氏によるワークショップを行いました。回っているにも関わらず、回転が止まり、それぞれの位置で絵が動いているように見える「驚き盤」と複数の写真を特殊な装置に載せて回転させることで動画に見える「プラクシノスコープ」を制作しました。

制作過程でどう見えるかを生徒たちに考えさせること、自身で発見させることなどを心がけて進行されました。驚き盤の動きを発見すると「すごっ」「めっちゃ動いてる」と声が一段高くなりました。おどろき盤とプラクシノスコープなどの映像の起源に触れ、それが現代のテレビやスマホの動画に発展していることを体験してもらいました。



驚き盤を説明する橋本氏



驚き盤を作る生徒



プラクシノスコープを鑑賞する生徒

越後妻有 大地の芸術祭2022 メディアアーティスト 橋本典久氏による展示

被災地の小中学校へ出張ワークショップをしていたいたっている橋本典久氏が、新潟県十日町市で開催された「越後妻有 大地の芸術祭2022」に出展されました。2018年の同芸術祭に財団 美術研修で訪れたことがあります。また、同芸術祭へは、奨学金などでお世話になっています。日本大学芸術学部教授 鞍掛純一氏も出展されています。

橋本典久氏が語る

「Life・size」ができるまで



十日町市立里山科学館
越後松之山「森の学校」キョロロ

大きくしたらカッコイイ

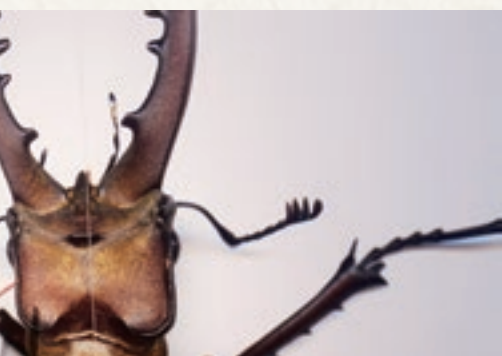
写真を使用した作品を制作する中、解像度に特化した作品を作りたいと考え、学生ユニットscopeと試行錯誤していった。昆虫というテーマが出てきたときは驚きでしたが、昆虫は、色・艶・形に多様性があり、拡大することで人に訴えるものがあると考えました。画像データの加工も試してみましたが、昆虫は完成された美しさを持っていて、手を加えようがないことにも気がつきました。昆虫の姿をそのまま、倍率を気にせず、人間と同じ大きさに拡大しました。解像度がとても高ければ、近づくだけで肉眼では見えないようなところまでよく見えます。題名「Life size」はライフサイズと読みますが、実は「生命体から大きさの概念を引いて均等に揃える」という意味でもあります。小さな虫を自分と対等に見ることで、



「Life・Size」人間大のコガネムシの屋外展示と橋本典久氏



トンボの翅の模様。学術的にはこの模様でトンボの種を同定する



ミヤマクワガタのくし形の触覚

何が見えるでしょうか。

この作品を見た一般の人から、自然の見方が変わったという声を聞きました。一方、専門家はどうかとらえるだろうか？と思っていたところ、各地の展覧会に呼ばれるようになりました。美術館、科学館、昆虫館、博物館など幅広く声がかかるようになりました。

生きたまま撮影

細部がよく見えるためには、各部位にピン트가あつた画像を取得する必要があります。様々な実験をしましたが、2006年当時の撮影機材では困難でした。たまたま机にあつたイメージスキャナーを用いて撮影してみたところ、驚くほど良い結果が生まれました。

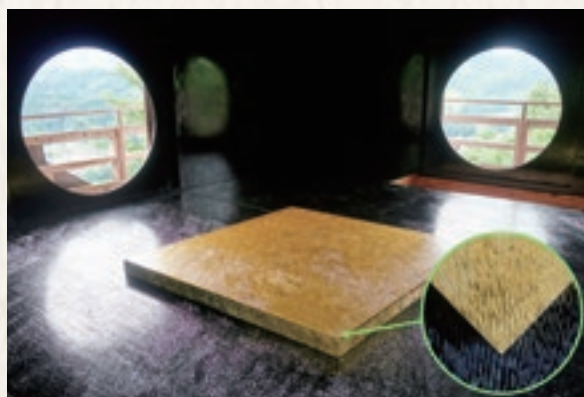
自分たちで捕まえた昆虫を、生きたまま撮影します。多くの昆虫は、標本にする

と色・艶・形が変わってしまふからです。昆虫を冷凍庫で数分冷やして動きを止め、撮影に挑みます。スキャン途中で動いてしまったらやり直します。数時間から、時には数日かかります。寒さに強い虫もいて、オオゾウムシはどんなに冷やしてもすぐに動き始めてしまいます。何度も撮り直し、撮影が成功するまでに1週間もかかりました。

ZooMuSeeを全国に

「Life・size」のために撮影したものをデータベース化した「ZooMuSee」(ズームシー)を制作しました。これは、収集した大量の昆虫画像をパソコンの画面で検索、拡大・縮小できるものです。昆虫標本では表すことの出来ない、生きた昆虫の色・艶・形が映像記録として残っています。現在、温暖化など様々な要因によって生物環境の変化が危惧されています。「ZooMuSee」は、地域のデジタルアーカイブスとして、有用なツールとなると考えます。常設展示は、茨城県自然博物館と新潟県十日町市の越後松之山「森の学校」キヨロクの2カ所です。これを全国に拡大し、各地域周辺で採集した昆虫画像のデータベースを「ZooMuSee」で結びたいと考えます。

作家としては、これらの作品は、画家が行うデッサンと同様だと考えています。世界の成り立ち、宇宙はどうなっているかを知るツールであり、「はじまり」と位置付けています。



日本大学芸術学部 鞍掛純一氏の脱皮する時(松代城の天守閣)



「ZooMuSee」のホーム画面



ZooMuSeeの一部を見ることができます

デジタル一眼レフカメラ講座 (その7)

2022年9月8日(木)

3年ぶりにデジタル一眼レフカメラ講座「作品作りを楽しむ、写真のワークショップ」を開催しました。今回は、プロカメラマンの立川則人さんを講師に迎え、地元 中目黒で撮影会を行いました。

写真の歴史から

様々なメディアがある中、写真に触れる機会は、減ってきています。これから写真の魅力を引き出すにはどうするか？などを写真の歴史を振り返りながら考えていこうという座学でした。

写真は、肖像写真、風俗や戦場などの記録的なものから絵画的なアートなものへと。そして小型の携帯できる「ライカ」カメラの登場で街に出て撮影できるようになりました。白黒からカラー写真となり、鮮やかな表現ができるようになり、さらには個人的な利便的なものへと、技術と共に表現方法の変遷が紹介されました。

撮影会では、中目黒周辺を会場として、12名の方が思い思いにシャッターを押し、建物や人物、野鳥、樹木と目黒川などあらゆる

ものが被写体となりました。中目黒ならではのものもあれば、シロサギや川面の写真など奥多摩での撮影?と思わせるものまで、どれも素晴らしい作品でした。同じ場所、時間帯で撮影したにも関わらず、これだけ幅広いものが撮れたことに驚きました。

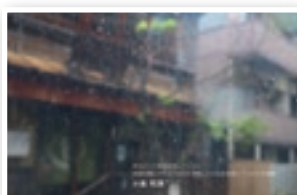
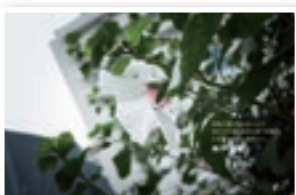
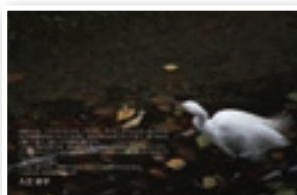
今回は、写真を撮るだけでなくそこに言葉を添えようというテーマが与えられました。写真家 中平卓馬に倣って写真と言葉のコラボレーションの挑戦です。写真に合わせ一句謳ったもの、被写体や作品への思いなどを綴っていただき、写真にプリントしました。

中目黒のGTギャラリーにて写真展を開催しました。

写真展「わたしの見つけた瞬間」vol.7

10月24日(月)～11月1日(火)
於中目黒GTギャラリー

誌上写真展

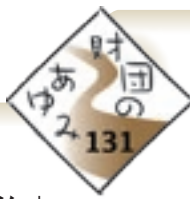


撮影会を前に立川講師からアドバイス

心得

格に入りて格を出でざる時は狭く、格に入らざる時は邪路に走る。格に入り格を出でて初めて自在を得べし。詩歌文章を味て、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。

芭蕉



「都内の美術館」をたずねて

「美術研修」

2022年10月12日

講師：美術研究家 沼辺 信一

3年ぶりに美術鑑賞研修会を開催し、アーティゾン美術館を訪れました。
福岡県久留米にルーツがある、幼なじみの青木繁と坂本繁二郎の作品展と
同時開催の石橋財団コレクション選「田園、家族、都市」を鑑賞しました。

■アーティゾン美術館
生誕140年 ふたつの旅
青木繁×坂本繁二郎

■アーティゾン美術館

公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館は、ブリヂストンタイヤの創業者 石橋正二郎の美術コレクションを展示するため1952年に開館しました。2015年から5年間の休館を経て、アーティゾン美術館として生まれ変わりました。アートとホライゾン（地平）の造語で、時代を切り拓くアートの地平を多くの方に感じ取っていただきたいとのコンセプトです。同美術館には、レンブラント、ルノワールやモネをはじめ、他にも世界的に価値ある名作が多く所蔵されています。

■青木繁

青木繁は、東京美術学校在学中に誰も描いたことのない日本神話に題材を得た作品群でデビューします。そして「海の幸」（重要文化財）で早熟な天才ぶりを発揮し、画壇を驚かせました。

青木繁は、卒業後に坂本繁二郎らと千葉県館山の布良（めら）海岸に滞在しました。坂本繁二郎が目にした大漁の光景に想像力をかきたてられ、「海の幸」を描き上げました。それは、青木繁本人が見た光景ではなく想像力で描かれたもので、大胆な画面を生み出しました。また、漁師のなかに恋人である福田たねと思われる女性が描かれています。

「わたつみのいるこの宮」（重要文化財）は、兄の海幸彦から借りた釣針を探しに海底に降りた山幸彦が海神の宮殿の井戸でその娘の豊玉姫に出逢います。二人は結婚し、生まれた息子は天皇家の祖となった神話を描いたものです。左下の足元から泡が湧いており、海の中であることが表現されています。夏目漱石は、小説『それから』のなかで「いい氣持」の絵と称賛した絵画です。
1907年の久留米へ帰郷後はふるわず、28歳の若さでこの世を去りました。まさに

■坂本繁二郎

短距離ランナーのごとく走り去ってしまった作家でした。

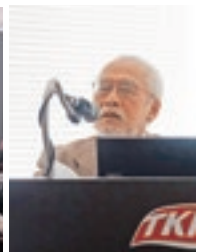
坂本繁二郎は、1902年、青木繁に誘われ上京、不同舎と太平洋画会研究所に学びました。青木没後は、遺作展と画集刊行に奔走しました。

坂本繁二郎は、農村や動物といった原風景を多く描いています。その後、フランスへ留学しますが、パリ市内だけではなく、ブルターニュ地方などの郊外を旅したところが坂本繁二郎ならではです。留学を機に、作風が大きく変わります。水色や桜色のような中間色を使い、馬の目や影を実物とは異なる色で表現するようになりました。帰国後、郷里の久留米に戻り、馬や牛を好んで描き、柿や栗、能面など身の回りの品々を繰り返し取り上げました。晩年には空中に浮かぶ満月を描いています。

坂本繁二郎は、青木繁の作品「海の幸」が重要文化財になったのを見届けて、87歳でこの世を去りました。それは偶然なのでしょうか。短命であった青木繁とは正反対な、長距離ランナーのような作家でした。

当財団の美術鑑賞研修会は、40年前に旧ブリヂストン美術館から始まりました。コロナ禍で休止してきた研修会の再開が同美術館鑑賞となり、その巡り合わせに感慨深いものを感じました。

事前に別会場にて、沼辺信一氏からスライドを用いたレクチャーを受けてからの鑑賞となりました。沼辺氏の解説は、作品の評だけでなく、作家の作風変化や対照的な人生までを交えたものでした。絵を鑑賞する感動が二倍にも三倍にも上がったように感じました。次回研修会の期待も膨らみます。



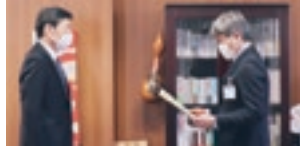
1 解説する沼辺信一氏 2 研修会場 3 青木繁《海の幸》1904年 重要文化財 漁師の中に女性が…(右から4人目) 4 青木繁《わたつみのいるこの宮》1907年 重要文化財 5 坂本繁二郎《帽子を持つる女》1923年 6 坂本繁二郎《放牧三馬》1932年 7 アーティゾン美術館外観
上記3~6の所蔵元 石橋財団アーティゾン美術館蔵

ご報告



目黒区より 「図書寄贈」への感謝状受領

当財団が行っている小・中学校への図書寄贈に対して、1月17日目黒区から感謝状を授与されました。当財団では毎年、目黒区をはじめ全国9つの市区町の小・中学生の心の糧になるように、と多くの図書を寄贈しています。これからも子どもたちの学びのきっかけになるよう図書寄贈を続けてまいります。



関根教育長(右)から感謝状を授与される城真二常務理事

星空ミュージアム開催

彫刻奨学生作品を設置している山梨県笛吹市の「藤生園」で、9月から10月の土日祝に「星空ミュージアム」が開催されました。彫刻や和傘、お滝のライトアップが実施され、幻想的

な雰囲気と満天の星空を多くの方が楽しみました。



ライトアップされた彫刻と和傘

アウトリーチ プログラムへの協賛

当財団では、公益財団法人目黒区芸術文化振興財団が主催している「アウトリーチプログラム」に協賛しています。この事業は、目黒区内の小中学校にプロのアーティスト(音楽家、ピアニスト)を派遣し、生の演奏を観て・聴いて、感じて、芸術文化に触れて一緒に楽しむことを目的としています。コロナ禍のおり感染対策をしっかりと



素晴らしい演奏を響かせる演奏家

芸術文化に触れて一緒に楽しむことを目的としています。コロナ禍のおり感染対策をしっかりと

施したうえで体育館での開催となりました。生徒たちは素晴らしい演奏を真剣に聴いていました。

ミンダナオ子ども図書館 (MCL)へ支援物資を送付

毎年恒例となっている、フィリピン「ミンダナオ子ども図書館(MCL)」への支援物資の寄付も、昨年9月で12年目となりました。みなさんからの善意のおかげで、衣料品やぬいぐるみ、タオル、リュックサック、運動靴など、今年も多くの物資が集まりました。子どもたちに素敵なクリスマスプレゼントを届けることができました。



優しさが詰まった贈り物

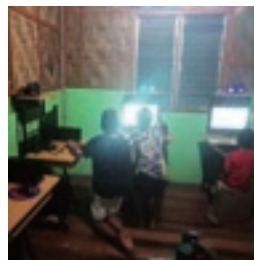


タオルはキッチンで使います

ミンダナオ子ども図書館 (MCL)に 通信アンテナを設置

北野財団では、「ミンダナオ子ども図書館(MCL)」が行っている保育所建設の費用を助成しています。2022年は子どもたちに「教育を受ける機会を与えるための環境整備」として通信アンテナ設置に助

成をしました。男子寮、女子寮にそれぞれコンピューター室を作り、オンライン授業が受けられるようになりました。急速にデジタル化が進むフィリピンで子どもたちはこれまで以上に勉学に励むことでしょう。財団は今後も子どもたちに学ぶ機会を与える活動を行っていきます。



パソコンが設置された部屋

お知らせ



第45回 「趣味広げる世界・広がる世界」 事実に基づく小論文・エッセイ募集

コロナ禍となって早3年余り。私たちの生活は大きく変化しました。それまで当たり前と思っていた満員電車での毎日の通勤・通学が在宅に変わり、それに伴い会議や授業はリモートに変わりました。それならば、と都会を離れ地方に移り住む人が増えるなどニュースになりました。

これらの変化は私たちに「時間」を与え「場所」の概念を外し、何か新しいことを始めよう、やりたかったことに挑戦しよう、今までやってきたことをもっと極めよう、と一歩を踏み出すきっかけとなりました。

超高齢化社会の現代、仕事からリタイアした人たちにとっても、趣味は生活の一部となっています。何かに夢中になり没頭することによって力が湧いてきて集中力がついたり、心と体が健康で元気になったり、まさに生きがいとなっています。また若者においてもスポーツやジムで自分を磨いたり、語学や楽器を学んだり、ボランティア活動によってあらたな発見や人とのつながりを実感したりしています。趣味を通して自身が成長し、世界を広げ、起業や新しい仕事に就くなど、あらたな夢やチャレンジにもつながります。趣味によって、私たちは自分の世界を広げることができ、また趣味をきっかけにして自分の世界が思わぬ方向に広がることもあります。

単調な日々にとどめききを与えてくれたものは何でしょうか。そこから得た学びはその後の生活にどのような彩りを添えたのでしょうか。ご自身の経験を綴って、今悩んでいる人や一歩を踏み出せずにいる人の背中をそっと押してください。

応募規定 縦書き400字詰め
原稿用紙8枚×10枚

締切 2023年5月9日(火)

賞金

1席(1編) 賞状・副賞50万円
 2席(3編) 賞状・副賞20万円
 3席(5編) 賞状・副賞5万円
 佳作(10編) 賞状・副賞3万円

入賞発表 2023年9月初旬

表彰式 2023年11月10日(金)

会場 The Okura Tokyo
 (ホテルオークラ東京)

奨学生募集

— 学習意欲のある社会人を応援 —

奨学対象

・科目等履修生(学生を除く)
 ・放送大学大学院修士全科生および選科履修生(ただし28歳以上または実務経験3年以上)
 申込者の中から書類選考のうえ奨学生を決定します。なお奨学金は給付で返済不要です。

締切 2023年5月11日(木)

〈科目等履修奨学生〉

奨学金 年間20万円
 定員 15名程度

〈放送大学大学院修士全科奨学生〉

奨学金 30万円(各年度15万円)
 定員 10名程度

〈放送大学大学院選科履修奨学生〉

奨学金 年間7万円
 定員 15名程度

ご退任・ご就任のお知らせ

多年にわたり、評議員として当財団のためにご尽力いただきました鈴木洋さん、青木清太郎さんのお二方が2022年11月の評議員会をもちましてご退任されました。これまでのご功績に深く感謝申し上げます。
 また財団活動の充実に努めるため、あらたに大谷裕巳さん、古田透さんがご就任されました。



鈴木 洋さん



青木 清太郎さん



大谷 裕巳さん



古田 透さん

こ・ち・ら・編 集 室

コロナ禍となって早3年余り、いつになく平穏な日常が戻ってくるのか、と幾度も不安な春を過ごしてきましたが、ここへ来てようやく大きな口を開けて笑える春を迎えることができるかもしれません。昨年まで財団では講演会や一日での研修を開催するにとどまり、泊まりがけでの研修を開催することができませんでした。したが、やっとこの春に一步を踏み出します。これまで事業の多くが延期もしくは中止を余儀なくされ、そのたびに賛助会員のみなさまはじめ、多くの方々にご迷惑とご心配をおかけいたしました。これからは、またみなさまの学が気持ちに寄り添い、楽しく、安心してご参加いただける様々な事業を進めてまいります。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第131号

2023年3月10日発行

編集人 城 真二

発行人 北野 重子

発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会

〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号

電話 東京 03(3711)1111

表紙ギャラリー

当財団は、『出会いドラマ、感動する心を大切に』というスローガンのもと、出会いを大切に、様々な学ぶ機会を提供してきました。人との出会いだけではなく、城や神社仏閣などの歴史的建造物や長い歴史に育まれた美しい原風景との出会いからも学ぶことは多いのではないかと考え、『世界遺産』を財団機関紙でご紹介します。

大浦天主堂(長崎県)

大浦天主堂(正式名称「日本二十六聖殉教者聖堂」)は、豊臣秀吉の命により刑に処された26聖人殉教の地である長崎市西坂の丘に向かって建っています。2018年「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の1つとして、世界文化遺産に登録された国内現存最古のゴシック様式の教会です。白い漆喰の外壁と高い尖塔、側面や天窓の明るいステンドグラスが特徴です。教会正面右の祭壇にはフランスから持ってきた「信徒発見の場」の教会であったことにあります。このような歴史の悲哀を感じる大浦天主堂にぜひ一度お出かけになられてはいかがでしょうか。

正面奥に「十字架のキリスト像」、入り口には「日本の聖母像」が置かれていて、その美しさには感動すら覚えます。



放送大学長
博士(学術)

岩永 雅也さん

MASAYA IWANAGA

意欲こそが才能 学ぶ意志を持ち、常に懸命に

2021年4月に放送大学の学長に就任され、当財団の研究助成の選考委員長を務めていたという岩永学長。ご自身の経歴と研究内容、生涯教育に対する考え方についてお話しいただきました。

—岩永学長のご経歴と、主な研究内容をお教えください。

1977年に東京大学経済学部経済学科を卒業した後、同大学院で教育社会学を専攻しました。その後、大阪大学人間科学部で助手を務め、1984年に放送教育開発センター(後に放送大学に承継)の助手となります。その後、文部省の派遣によるバージニア大学での1年間の研究などを経て、1989年に放送大学教養学部の助教授となります。2000年に教授とな

り、2021年4月より学長を務めています。

元々は労働市場論を学び、その後、労働市場に入ってくる若い方々の人材育成に目が向き、高校教育、進路指導などを研究しました。その他、遠隔高等教育や生涯教育、才能教育などを専門としています。才能教育では米国やフランス、ドイツでも調査研究しました。現在も、特異な才能を持つ子供への支援策を検討する有識者会議の座長を務めています。

—学長として特に力を入れておられることをお教えください。

放送大学は今年で40周年となりました。今、本大学は転換点を迎えています。まず、学生の欲求が多様化しています。本大学の設置当初は、学位を求めて入学する学生が多かったのですが、今は、若いころに学べなかった分野をリカバーしたい、教養を身に付けたい、仕事に生かせるスキルを学びたい、といった需要が増えています。

また、私たちの競合相手とも言える、通信やオンラインで学びを提供する機関が増えています。これまでのように番組を作っただけでは私たちの価値を示すことは難しいでしょう。時代の変化と

学生のニーズに応じた教育を作り上げるため、変革を進めているところです。

一方で、社会におもねった教育は本当の教育と言えるのか、という議論があります。先人が知恵を絞って作り上げてきた学問体系は厳然とあるべきで、それを伝える姿勢を忘れてしまっただけの御用聞きになっってしまう、と。理想と現実、仲間たちの思い、本学の体系性、それらのバランスをとるのが学長である私の務めです。

—北野財団の印象についてお教えください。

私が選考委員長を務めている研究助成事業はもちろん、懸賞論文やその他の事業もとても興味深いと感じています。日本では生涯教育に特化した支援をしている財団はほとんどありません。北野財団の活動は非常に意義があるものだと考えています。生涯教育の発展のために、これからも活動を継続していただきたいですね。私の専門である才能教育と生涯教育は全く異なるものと思われるかもしれませんが、そうではありません。私は意欲こそが才能だと考えています。年令を重ねても学びたいという意欲が強い方は、才能がある方です。学ぶ意欲をどれだけ持っているかが大切です。



—ご趣味、余暇の過ごし方をお教えください。

仕事でも趣味でも、何でも真正面から取り組むことにしています。高校では馬術部に所属し、毎朝馬にまたがっていました。大学に入ってからは自転車に熱中します。馬術とは「またがる」という共通点があり、馬術ほどお金がかからないことがのめり込んだきっかけです(笑)。東京から実家のある佐賀の嬉野まで8日間かけて自転車で帰ったこともあります。現在楽しんでるのが山登りです。昔は北アルプスや八ヶ岳などにも登りましたが、最近は低登山が中心です。空気が景色も美しく、頂上に近づいてきて視界が開けたときの気持ちよさは何物にも代えられません。

—読者へのメッセージをお願いします。

楽しいことでも辛いことでも一生懸命に取り組むことが大切だと思います。「Someone to watch over me」。私の好きな言葉で、訳すと「誰かが私を見てくれてい」となります。これは二つの意味で大切です。一つは、誰もいないから手を抜いてもいいや、と考えるのは結果として自分が損をすることになる。誰かが見ているよ、という戒めです。もう一つは、がんばったときに、誰かがきつと見てくれる、評価してくれると思うと力が湧きます。だから常に一生懸命やるし、腐ったりしない。これは生涯学習の極意かもしれませんね。

「放送大学と北野財団は理念に共通点が多い」と話される岩永学長。当財団を通じてより多くの方に学びの機会を届けられるよう、今後もご指導をよろしく願っています。



颯爽と馬にまたがる若き日の岩永学長

